

千葉県保育アドバイザー事例集

千葉県健康福祉部子育て支援課

令和7年3月



はじめに

国では、人口減少に対応しながら、こどもまんなか社会の実現を図るため、保育政策について、今後は、待機児童対策を中心とした保育の量の拡大から、地域のニーズに対応した質の高い保育の確保・充実と、全てのこどもの育ちと子育て家庭を支援する取組の推進に政策の軸の転換を図っています。

質の高い保育の確保・充実に向けて、自治体や保育の現場においても、様々な取組が進められていますが、目に見えない「質」をどのように向上し、評価するのか、創意工夫が求められるところです。

こうした中、県では、この「保育の質」を向上させるための取組として、令和5年度に3つの新規事業を立ち上げました。

① 自然環境保育推進事業（ネイチャー）

自然保育に取り組む施設を県が認証し支援する。

② 保育アドバイザー派遣事業（サイエンス）

遊びを通じて、科学的な見方や考え方を育む保育を実践する。

③ 保育の質の充実に向けた調査事業（アカデミック）

保育の状況を調査・分析し、保育実践の改善に活用する。

保育の現場に「新しい風」を吹き込みながら、保育のあるべき姿や将来像などを模索していこうとするものです。

このうち「保育アドバイザー派遣事業」は、保育所保育指針における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に着目し、試行錯誤しながらこれを実践していこうとする実証的な取組（モデル事業）です。

このたび、この取組を取りまとめた「保育アドバイザー事例集」を作成いたしましたので、各施設における保育実践の一助となることを期待し、紹介させていただきます。

結びに、本事業の実施に当たり、御尽力、御協力をいただいた保育施設、市町村の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和7年3月

千葉県子育て支援課長 椿原 有希

目 次

●事例紹介

- ①塩焼第二保育所（市川市、公立保育所） 富田 久枝アドバイザー 1
- ②さつきが丘第一保育所（千葉市、公立保育所） 谷 信子アドバイザー 12
- ③ひかり隣保館保育園（柏市、私立保育所） 羽田野 茂美アドバイザー 18
- ④豊和保育所（匝瑳市、公立保育所） 堀江 節子アドバイザー 26
- ⑤ケヤキッズ保育園（松戸市、私立保育所） 吉田 治子アドバイザー 34

●総括保育アドバイザー コメント

- ①富田 久枝アドバイザー 46
- ②篠原 孝子アドバイザー 48

施設名

塩焼第2保育園（市川市、公立保育所）※前年度から継続

アドバイザー氏名

富田 久枝（千葉大学名誉教授）

派遣期間及び回数

令和6年4月～12月 計7回

今年度の活動記録

【4月10日、4月24日】

- 園長、主任、担任（年長）と、今後の進め方や訪問日程等の打ち合わせ
- 4月から5月にかけて取り組めそうな内容の確認
 - ① 春の自然（園庭や近隣の公園、土手）
 - ② 新しい保育室の環境との出会い（生活空間を自分たちで創る）
 - ③ 園庭の仲間を自分たちで企画して創り、観察をする

【5月24日】

- 取組の振り返り等
 - ① 春の自然（いろいろな葉っぱを浮かべたり、流したりして違いに気付く）
 - ② 聴診器（ネイチャーゲーム：子供用）や体測定などの機械も使い、心臓の音や木の鼓動、その他の拍動など、生きているという生命に関心を持つ取り組みを行った。
 - ③ 夏の自然観察や遊びに使う、種や植物について子どもたちがどのように捉えて遊びを考えているか等共有し、苗や種の購入の相談を行った。
- 👉 科学的な子どもの学びという新しいスコープから自分の保育を振り返ることで、保育者自身の気づきが増え、それを子どもたちに投げかけることで子どもたちの見逃していた遊びや気づきに光を当てることが出来るようになった。結果、この取り組みは保育者の気づきを促し、保育の質を上げることが確認された。

【6月26日】

- 取組の振り返り等
 - ① 春～夏への自然（いろいろな葉っぱを浮かべたり、流したりして違いに気付く）
 - ② 4月から続いている「糸電話遊び」糸電話で話すときは少し距離を置いて小さめの声で話すことが大切だという事を発見していた。また、ある子どもの発言から糸電話の糸が震えて声を伝えることに子どもたちが気づいていた。
 - ③ 夏の自然観察から緑色のブドウを手に取り、もっと大きくなると何色になるのだろうと熟するブドウからその色の変化を期待していた。
 - ④ 影の存在に気づき、影遊びは広まりつつある。少し、多くの子たちにも広め影絵遊びをみんなで楽しめるように考えていこう意見がまとまった。
 - ⑤ 6月の予測される遊びを話し合い、9月まで繋げることとした。
- 👉 6月に入り子どもの遊びからその科学性や面白さに保育者自身が気づく楽しさを感じている。記録も丁寧に取っているのので、園全体での共有の場も昨年並みに設けよ

うという話し合いになった。

【9月5日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 酷暑も収まり、様々花を集めて色水で遊んだり、種を集めたりと夏ならではの遊びの中で、種の在処を発見したり、イチジクの粒粒はみんな種と気づいたり、子どもの科学的なまなざしはいたるところで発見できた。
- ② 9月に入って未だ、やっと実をつけたひまわりや、草花を使った色水も継続して観察することとした。
- ③ 今年は酷暑で戸外での活動を実施できない日も多かったので戸外での活動で多くの発見を期待することとした。

👉今年度は若手の担任と主任、園長と協力しながら試行錯誤しながらの指導で有ったが、担任自らが、様々な視点や見通しを考えて、自然や科学といった視点で保育を見つめる楽しさを味わっていることが伺えた。ある枠組みをもった保育は保育者の力量を育てることも確認できた。

【10月17日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 暑い日も多かったため、戸外での活動も制約が多く、これまでの計画の継続を中心として実践を続けてきた内容について確認を行った。
- ② 10月に入り、新しい栽培がはじまり、17日の訪問時には「ほうれん草」と「小松菜」の種から小さな芽が出ていて、保育の中で小さな発芽を子どもたちとそれぞれの苗の特徴について観察を行っていた。

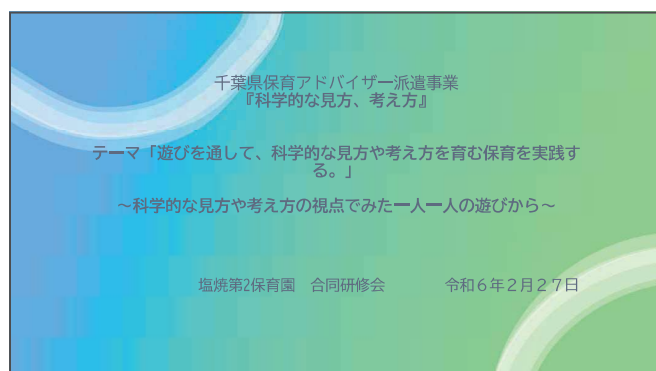
👉暑かった日も落ち着き、子どもたちはひまわりの花の中に種が有ることや、小松菜とほうれん草の苗には根本がほうれん草は小さな芽のうちから赤いことに気づき、保育者ともども、科学的な見方の奥深さを感じ、事例のまとめを意識した記録の取り方を確認した。

【12月23日】

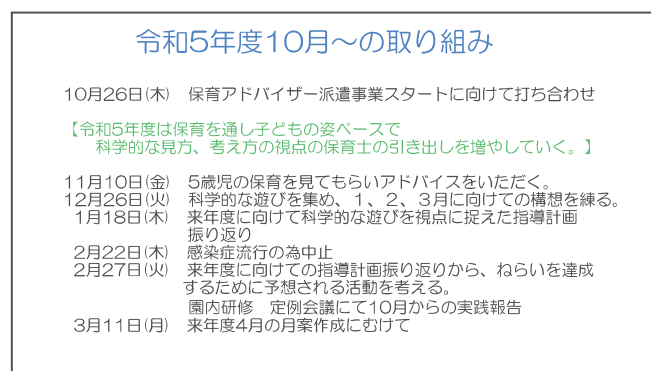
➤ 取組の振り返り等

- ① 11月は秋の実りなどから松ぼっくりの浸水性(水を含むと蕾のようになってしまふ)に気づくなど、秋ならではの気づきが得られた。
- ② 保育者より子ども同士の会話や発言が科学的になってきて、この取り組みを始めて本当に良かったと感謝の言葉を頂いた。
- ③ 今後、訪問が終っても、園全体でこの取り組みの経験を活かして、市川市全体でも取り組めるような伝え方をしていきたいと意欲を語って下さった。





1



2



3



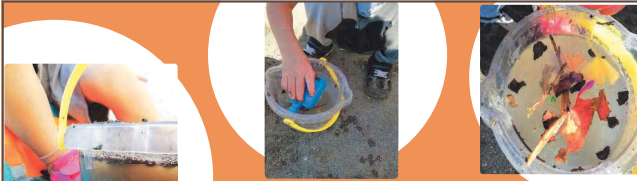
4

消えた石?!

- **きっかけ**
バケツに水を入れ遊ぶ途中、木の枝や落ち葉を発見！
「バケツに入れてみよう!!」
- **気づき**
浮いた葉を小枝ですくい、お皿に移す
「ねーねー〇くん つりみたいだね!!」
【葉が水に浮いていることに気づく・浮いている葉と枝から釣りをイメージし、友達と共有する】
- **試す**
「石もお魚にする?」「入れてみよう!!」「あれっなくなっちゃった!!」
【石も浮くと考え遊びに取り入れるが、予想外のことが起こる】
- **発見**
保育士が透明バケツを提案
「葉っぱは浮くね」 石は重くから下にいっちゃうのかな?」
【ものと水の浮力関係を見える化したことで、石が沈むことに気づく】

5

いろんなもので試してみたい!!
<わくわくがとまらない!!>



6

4 歳クラス ごっこ遊び



「起きる時間!!」 「お寿司買いましょ」 「おうちに帰る時間よ」 「会社に着いたわ」

7

ごっこ遊びからの時間軸の理解

- **きっかけ** 屋上で三輪車を使用し女児2名が遊び始める。
(大型遊具はなく、三輪車等の乗り物・縄跳び、フープ等がある環境)
- **展開** 三輪車に乗り、屋上の端を「家」や「店」等に見立て遊んでいる。途中男児1名が加わる。
「起きる時間!!」「お寿司買いに行きましょ」「おうちに帰りましょ」「会社に行かなくちゃ」
【何も無い場所であるが、イメージを共有しながら生活の再現遊びを楽しむ】

富田先生より
「子どもたちは時間軸を理解し、遊びの中に取り入れている」

子どもの姿を立体的に視点を広げて読み取ろうとすると、ごっこ遊びとして捉えるだけでなく、様々な見方、考え方の捉え方が変化してきました。

8

5 歳クラス 今年度初 雪遊び！



雪と水がはいてるよ！？

「ぎゅってしたらくっつく！」

スプーンも抜けないよ…！」

9

個体から液体へ
固まる不思議…

<きっかけ> 雪が降った日、保育園 が屋上からコンテナに雪を入れ、室内で雪遊びが始まる。

<気づき> 「あれ？どうして(コンテナ内に)雪と氷があるの？」 「水入れたの、誰？」
【雪が溶けるとなくなるものだと考えていることから、誰かが水を入れたのではないかと予測】

<友達と伝え合う> 「雪は溶けると水になるよ」 外だと水が固まってる」
【実際に園庭を見ることで、園庭の水たまりは雪が溶け水になったものと気づく】

<試す> 「ぎゅってするとくっつく！」「うわぁすごい！！」「みて、スプーンも抜けなくなっちゃった！」
【しっかりと固めることで、雪が固くなり機回しや物がしっかりとくっつくことを発見。なぜだろう…と疑問に繋がる。】

10

来年度に向けた 科学的な見方、考え方を捉えた指導計画					
	1期(4, 5月)	2期(6, 7, 8月)	3期(9, 10月)	4期(11, 12月)	5期(1, 2, 3月)
ねらい	・年長児としての自然を持ち、友達と関わりを深めながら様々な活動に意欲的に取り組む。	友達との関わりを深め、お互いの思いを伝え合いながら遊びを楽しむ。	遊びや生活の中で積極的に役割を担い、自己意識しながら充実感や充実感を得よう。	遊びや生活の中で積極的に役割を担い、自己意識しながら充実感や充実感を得よう。	友達と共通の目的に向かって、協力し合い自分の力を発揮したりしながら活動を取り組み、達成感や充実感を得よう。
内容	・身近な自然や動物に興味を持ち、観察をしたり、自然や季節の変化に気付いたり驚いたりする。	・友達と一緒に遊びをしたり、協力して活動したりする。	・いろいろな材料を使い、自分がイメージしたのを作る楽しさを感じる。	・数量、図形、時間、健康などを理解し生活や遊びに取り入れる。	・生活に必要な簡単な漢字や文字などに興味や関心を持ち、生活や遊びに取り入れる。
活動	・自然や身近な動物や植物に興味を持ち、生活や遊びに取り入れ、試したり調べたりする。	・自然や身近な動物や植物に興味を持ち、生活や遊びに取り入れ、試したり調べたりする。	・自然や身近な動物や植物に興味を持ち、生活や遊びに取り入れ、試したり調べたりする。	・自然や身近な動物や植物に興味を持ち、生活や遊びに取り入れ、試したり調べたりする。	・自然や身近な動物や植物に興味を持ち、生活や遊びに取り入れ、試したり調べたりする。

11

科学的な見方・考え方って…！？

職員からの感想・気づき

最初は「保育園の中の科学って何だろう。」「どうしてこれをやるの？」と思った。

身近なところに科学があった。科学の視点で子どもが気づいてあげられなかったことがわかった。

事例を聞いて少し理解できた。今まで、子どもの興味に気づいてあげられなかったことがわかった。

科学的な視点で子どもの遊びを見てみると、いろいろな素材を組み合わせることがわかった。やっぱり、実験って大切なんだ。

好きなことをとことん探求することが大事だ。

1歳児クラスでも外遊びの時に室外機から出る風に気づき、その前で「あー」と声を出して揺れる声を出していた。これ、だって科学だ！

赤ちゃんの時から好奇心や科学の道を模索するようにしたい。

「自然」と大きく関わっている。

食育も科学。実験だけが科学じゃない。

「なんでだろう」「どうしてだろう」の子どもたちの好奇心を育てる。正解を出さなくてもいい。正解を出さなくてもいい。正解を出さなくてもいい。

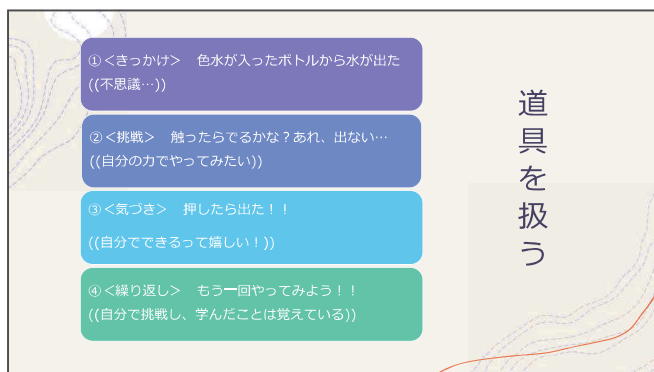
12



1



2



3



4

子どもの気付き

- <きっかけ> 年上の子がしている遊びを見て、「やってみたい！」オシロイバナの色水遊びがスタート！
- <挑戦> 色の出し方のコツをつかみ色の濃さを比べたり入れる花の数を増やしたりと、試行錯誤
- <気付き> 秋になるとオシロイバナからコスモスの色水遊びに変わっていく
- <あれ？> ネコジャラシは？？？

5

3歳クラス

くっつく！ぞうさんのお家ができるよ！



6

平面から立体へ

- <きっかけ> 同じ種類の玩具をつなぎ合わせ楽しむ
- <挑戦> 立体ができる事を発見
【保育士の支えの中、立体に挑戦！！（平面から立体へ）】
- <気づき> 「ゆらゆらする～」 「ここまでにしよう」
【支えなくても自立できる高さを見つける】

7

4歳クラス

乾いた泥団子はなんで硬いの？全然壊れない！
どうやったら壊れるかな？
水の中に入れてみよう！



8

変化する砂

<きっかけ> 絵本「どろだんご」絵本と同じことしてみたい！

<発見> 数日経った泥団子が落としても割れない！「これ、すごい固いよ！」「どうやったら壊れるかな？」

<挑戦> 「水に入れてみよう」

<大発見> 「どろだんごが浮かないね」「水が汚れない！」「バスボムみたい？」「バスボムより泡が小さいよ！！！」

崩れていく面白さに夢中 予想にも反している？

9

5歳クラス
夏・流しそうめんやってみよう！

1
玩具グラビティーでボール転がし
((リートをイメージし、パーツを運んでボールを転がす))

2
牛乳パックでコースを作りボール転がし→「流しそうめんやってみよう！」
((素材を用意し、切り貼りしたり組み合わせたりしながらイメージに近づける))

3
「うまく流れないよ」「もっと高くする？」「一度流してみようよ」
((これまでの経験、学びを友達と共有し工夫に繋げる))

10

秋・お祭りごっこ、お店屋さんごっこ

①ビー玉転がしの店開店！ → 障害物を作ってビー玉の動きを抑制してゴールを目指す → 高さや傾きを変えるとスピードが変わる！
((友達との協同作業の中で、長さ、高さ、角度の調整を繰り返す))

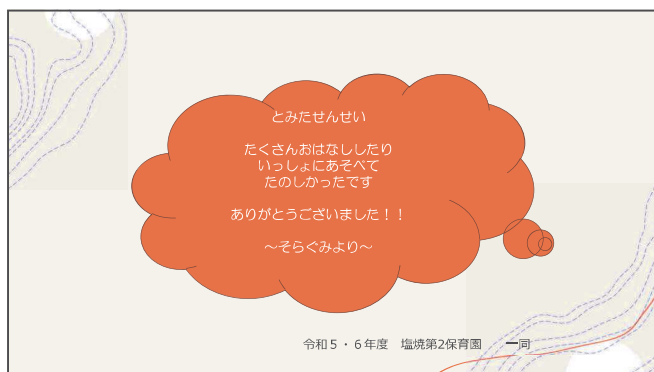
②金魚すくいのボーイ作り → 紙は水を吸ってしまうことに気付く → つるつるした物だと水は流れる！
((素材の持つ性質が分かり遊びに取り入れる))

11

冬・砂場で流しそうめん！！
((砂の性質に気付き イメージを実現するための道具を考える))



12



活動を通じての感想等

【施設の感想等】

面白そう！けれど難しそう…？という思いから自園の取り組みがスタートしました。保育アドバイザーとして富田久枝先生に月1回お越しいただき、子どもたちの遊びを科学的な視点で捉えるためのアドバイスをたくさんいただきました。科学的な遊びは身近にたくさんある事に気づき、私たちの意識に少しずつ変化が出てきました。

年長児の「これなんだろう？」「ちょっと試してみようよ」と夢中になっている姿が見えてくると、職員自身にも新たな発見や驚きがあり、子どもの姿を追うことが楽しくなってきました。「思考力の芽生え」「自然との関わり、生命の尊重」そして「協同性」等様々な面で子どもの育ちに繋がっていることも実感しました。

他クラスの職員に発信すると「これも科学だね」「子ども達は今ここに気付いているよね」と楽しそうな声が広がり、育ちの発見や共有、「全ての遊びは科学に通じている」との気づきにも繋がりました。また、保護者に伝えたと子どもたちが遊びから学びを得ている姿に驚く声もありました。

住宅街の中にある園ではありますが、園内外の植物、木々、空等の自然環境や砂や水等の素材に触れ、空き箱や道具を扱い試行錯誤する中で、子どもたちが心を動かされる瞬間を捉え支えることで、遊びが豊かになっていくことを取り組みを通し実感しました。

自然の素晴らしさ、科学の面白さの気づきや学びに繋がってくださり、楽しみながら共に取りくんでくださった富田先生の「子どもは知性の種だらけ」という言葉が心に残っています。子どもたちの「知りたい！やりたい！やってみよう！」の興味・好奇心・探求心が引き出される環境構成を試行錯誤しながら作り続けていきたいです。何より私たちが楽しみながら…！

【アドバイザーの感想】

今回、担当させていただいた園が市川市という自宅とも20分程度の距離で近いことも有り、また、公立保育園ということで、市川市からも応援を頂いたことが保育者のモチベーションにも大きく影響をしたと思います。「科学的な見方による子どもの学び」は私が古くて新しい視点だと思っています。6領域の時代には当たり前の視点でした。そんな、昭和的視点を持っているアドバイザーと市川市という公立の立場としての活動参加ただだけに、園長をはじめ保育者の皆様も本当に真剣に取り組んで下さったことが結果、大きな成果を得ることが出来たと思います。

印象的だった事例は、ラキューという小さなブロックの構成遊びの遊具ですが子どもたちはコマづくりを競い合っていました。その中で、一人の子どもの発案でラキューゴマを止めずして心の近くに小さなパーツを載せると飛ばされないという遠心力の特徴を使って遊んでいました。また、雪玉を並べて居たらみんなくつついて「なんで??」と疑問に思った子どもたちはまるで実験室のように試して遊ぶことを保育者と共に子どもの発想の凄さに驚きながらの実践でした。子どもが本来持っている科学性は環境と意味ある出会いをすることで引き出されるという大きな学びも得ることが出来たのは実践を協力してくださった園の子どもたちと先生方に深く感謝しています。自然科学は私たちの中に有ることを感じました。

施設名

さつきが丘第一保育所（千葉市、公立保育所）※今年度から

アドバイザー氏名

谷 信子（植草学園大学特命教授）

派遣期間及び回数

令和6年6月～12月 計7回

今年度の活動記録

【6月25日、7月16日】

- 所長、担任（年長）と打ち合わせ。園の案内、今後の取り組み方、訪問日程等。
- 現状の保育について（今後の取り組み方の検討）
 - ① 様々な野菜（西瓜、オクラ、キュウリ）を栽培している。育てた野菜は給食で出すこともあり、今後クッキングの授業も検討している。
 - ② 近くの業者が花の種をくれるので、保護者に手伝ってもらいながら花を育てている。
 - ③ 米作りを始めた時から、子どもの取り組んでいる姿や気づき等が文章や写真で記録されている。
 - ④ 米作りの活動を通して「科学的な物の見方や考え方を育む」保育の実践に取り組んでいく。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けていくことで、子どもの育ちを的確に捉えていく。

【8月27日】

- 担当保育士から経過の聞き取り
 - ① <子どもの姿>

毎年年長児が米作りをしているため、子どもたちは年長だからできる誇りがあり、張り切っている。米の生長の変化（色、苗の大きさ、形）をロープを使って測ったり色の変化を確認するために絵具を使用したりする事で明確に捉えることが出来ている。子どもから出た考えを具現化しているため、子どもは、達成感、満足感を抱き意欲的に取り組んでいる。
 - ② <保育士の関わり>

子どもの気づきを丁寧に拾いあげ、子ども自身が考え取り組めるような環境を作っている。10の姿とのつながりを意識して関わっている（記録あり）。
- 👉 前年度も米作りを行っていたが、今年度は、米作りを通して「科学的な見方や考え方を育む」ことに視点を置き「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と結び付けて取り組んでいることにより、新たな発見をすることが出来ている（保育士の気づき）。

【9月17日】

➤ 活動の様子を参観

① <グループ活動>

お月見（中秋の名月）にちなみ、飾ってあるススキを取り、子どもたちに「これは何？」と問かける。子どもは、「お米だ」「お米じゃないよ」と自分の思っていることを口にする。子ども達の様子をしばらく見た後、保育士は稲とススキを各テーブルに配り『違いは、何かを研究してみよう』と投げかける。稲穂についている米粒はいくつあるか？と提案する。

② <子どもの姿>

子ども達は、視覚（目で見て）、触覚（触って）、嗅覚（匂いをかいで）などを使い、その違いを思い思いに伝え合っていた。米粒を数える役割を決めるとき、じゃんけんで決める。話し合っで決める等グループによって色々な姿が見られた。出た意見を紙に書く。各グループで話し合ったことを発表する。役割を決める。

③ <保育士の関わり>

グループ活動の様子を見守り子どもたちの考え、意見を尊重し、状況に応じてアドバイスをする。

👉 子どもへの働きかけは「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点を捉えているため【今の育ちと課題】を把握している事により意図的、計画的に環境を構成している。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の《自然との関わり・生命尊重》《思考力の芽生え》《言葉による伝え合い》《数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚》《豊かな感性と表現》《協同性》保育とのつながりが明確となっている。

【10月15日】

➤ 稲刈り後の活動を通して子どもの育ち・保育士の関わりを振り返る

① <子どもの姿・保育士の援助>

籾から米を取り出す作業。指で採るのは辛い（楽しそうでない。）

⇒ケースを用意し保育士がやって見る。

(1) スムースに採ることが出来る。

(2) ケースがあることでまとまる。

(1)(2)に気付いた子どもは道具利用の利点を知り楽しみながら籾採りを行う。

この姿から工夫しながら最後までやり通し達成感を味わうことが出来た。

【米作りを通しての子どもの成長 ～10の姿から～】

① <思考力の芽生え>

稲の生長に伴いその変化を感じとったり気付いたりする中で好奇心や探究心をもち様々な取り組みを楽しむ。

② <協同性><言葉による伝え合い>

子ども自身が年長児の取り組みと意識し、自分だけの考えではなく友達の見解も受け入れて活動する。→伝える力、聞く力が伸びている。

③ <自然との関わり・生命尊重>

季節の変化、天候との関係等自然に対する関心強くなる（自然の恵みを感じる）。
命のつながり→今年収穫した粃を苗にし、来年につなげていく。

④ <数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚>

米粒を数える→一つの苗から多数の米が出来ることを知る。

👉【保育士の変化】

- ・視点をしっかり意識したことで子どもに経験させたいことが明確になった。
⇒子どもの育ちをしっかりと捉えることが出来た。
- ・子どもの気づきに丁寧に対応することが出来た（子どもの興味・関心に応じた環境を整えることが出来た。）
⇒子どもの興味を引き出す言葉かけや応答的な関わりを大切にしている。

【11月26日】

➤ 活動の振り返り

① <子どもの活動>

粃のついた米の重さを量った経験から粃を取った後の米の重さに興味を示したので量る（米の重さの変化、違いに気付く）。

- ・数の大・小、重い・軽い等数量に関心を持つ。
- ・粃を取ったことで軽くなる（数が小さい）ことを理解する。
- ・他グループの数量にも関心を持ち、違いに気づく。
- ・10以上の数字の読み方を知る。
- ・いろいろな単位があることを知る。

ク 数量や図形、標識や文字などへ関心・感覚

・遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などの親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

② <保育士の援助>

数に関心を持ち、違い（大きい・小さい・軽い・重い）に気付くことが出来るよう、粃がついている時の米の重さを数字で記入した用紙を用意する。数量に関心を持ち、親しむ環境を作る。〇〇g、〇〇粒等单位についても教える。

👉 若手の担任と主任、園長と協力しながら試行錯誤しながらの指導であったが、担任自らが、様々な視点や見通しを考えて、自然や科学といった視点で保育を見つめる楽しさを味わっていることが伺えた。ある枠組みをもった保育は保育者の力量を育てることも確認できた。

【12月23日】

➤ 活動の様子の説明

- ① 収穫したお米を給食室に持って行き焚いてもらう。（給食室との連携）

- ② おにぎり遠足のしおりを作る。おにぎりを自分で作る。作ったおにぎりを公園に持って行き食べる。
- ③ 自分たちで作ったお米を使い、自分でおにぎりにして食べる子どもたちの表情は生き生きとしていた。
- ④ <担任から>
一生懸命育ててきたものを食べることができる喜び・期待を感じることができた。同時に、お米を育てるにはたくさんの工程と労力、期間が必要であり、それを仕事として行ってくれる方がいるからこそ、おいしいお米を食べることができていることに気付けるようにした。

👉 <子どもの育ち>

- 気付いたり、感じたり、考えたりした事を自分の言葉で相手に伝える力がついた。また、様々な考えがあることに気づきそれを取り入れていく力がついた。
- 長さ、重さをはかる経験することで数に興味をもち長い、短い、多い、少ない、重い、軽い等を理解する。
- 文字に興味がなかった子は、文字に触れる経験をしたことで、文字に対して興味・関心を持つようになった。

<保育士の気づき>

- 米作りのねらい「米作りを通して食への興味や関心を広げる。」「米を作るまでの過程を知り米作りの大変さを知る。」に加え幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち「思考力の芽生え」「自然との関り・生命尊重」「数量や図形、文字やや標識などへの関心・感覚」に着目し意識を向けて取り組んだことで、今まで実践してきた米作りとは違う子どもへの働きかけ（環境づくり）をした事で食育だけでなく様々な育ちにつながっていると感じた。

<全体を通して>

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（思考力の芽生え）（自然との関り・生命尊重）（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）に着目したことで、子どもの姿をとらえる視点が明確となり、子どもの育ち「育っていること（現在の姿）」「育ってほしいこと（課題）」を理解し次への活動とつながる環境を作ってきた事で子どもたちは、豊かな経験を通して好奇心・探究心を満たし満足感、達成感を味わい様々な知識を獲得してきた。



科学的な見方や考え方を育む保育実践（米作り）（まとめ）

～さつきヶ丘第1保育所～

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

《思考力の芽生え》 《自然との関り・生命尊重》 《数量や図形 文字や標識などへの関心・感覚》

思考力の芽生え

- 米作りへの興味を引き出す（昨年の子の取り組みを話す）
→昨年の子児の姿を思い出し米作りへの意欲をもつ。
- 米はどう作るのか
→「発泡スチロールで作る」「水をあげる」と昨年を思い出し言葉にする。
→日常のことから「スーパーで買っている」という声も聞かれる。
- 絵本で見たり、実際に田んぼに見に行く。
→実際に見たことで水、土、太陽、苗が必要だと考え思いついたことを言葉にし伝え合う。
- トラ船に土を運ぶ
→最初はスコップで運んでいたが何度も往復しなければいけない事に気づきバケツを使用する

自然との関り・生命尊重

- 土づくりをする（直接手、足で触れる）
→土の感触、湿度、匂いを感じる。
- 田植えをする
→野菜の苗との違いに気づく。（米の苗は、土の中に押し込むように植え付ける）
- 稲の生長に伴い葉の色の変化に気づく。
→だんだん色が濃くなっているが、目で見ただけでは変化に気づきにくいいため絵の具で色を混ぜ合わせ確認してみる。
- 虫や鳥（雀）の存在に気づく。

数量や図形、文字や標識などへの関心・感覚

- 水の量で土の硬さが違うことに気づき、水の量を調整する。
- 苗が少しずつ大きくなっている事に気づき関心をもつ。
＜成長を確認するために＞
→ロープに印をつけ苗の高さの変化を確認する。
→定規を使い測り数字で確認する。

活動を通じての感想等

【施設の感想等】

- 今回のお米をテーマに進めていく中で米作りをしたことでお米一粒一粒の大切さに気付きお弁当のご飯を集めて食べる姿が増えた。継続的に取り組む楽しさや、次はどうなるんだろうという興味、意欲、関心につながった。
- 稲の色の違い調べる際に絵の具を使ったことで何を混ぜればどんな色になるかを考える思考力の育ち、色を混ぜてみて予測とちがう色になった時の発見なども経験することができた。
- 稲の長さをどうやって比べるかということを、友達と協力して考え、工夫する力が育った。
- 米作りは食育だけでなく様々なことを感じて育ちにつながった。どのような育ちにつながるかを考えながら保育することの大切さを考えながら保育することの大切さを改めて感じた

【アドバイザーの感想等】

＜子どもの育ち＞

- 気付いたり、感じたり、考えたりした事を自分の言葉で相手に伝える力がついた。また、様々な考えがあることに気づきそれを取り入れていく力がついた。
- 長さ、重さをはかる経験することで数に興味をもち長い、短い、多い、少ない、重い、軽い等を理解する。
- 文字に興味がなかった子は、文字に触れる経験をしたことで、文字に対して興味・関心を持つようになった。

＜保育士の気づき＞

- 米作りのねらい「米作りを通して食への興味や関心を広げる。」「米を作るまでの過程を知り米作りの大変さを知る。」に加え幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち「思考力の芽生え」「自然との関り・生命尊重」「数量や図形、文字やや標識などへの関心・感覚」に着目し意識を向けて取り組んだことで、今まで実践してきた米作りとは違う子どもへの働きかけ（環境づくり）をした事で食育だけでなく様々な育ちにつながっていると感じた。

＜科学的な見方や考え方を育む保育実践の振り返り＞

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（思考力の芽生え）（自然との関り・生命尊重）（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）に着目したことで、子どもの姿をとらえる視点が明確となり、子どもの育ち「育っていること（現在の姿）」「育ってほしいこと（課題）」を理解し次への活動とつながる環境を作ってきた事で子どもたちは、豊かな経験を通して好奇心・探究心を満たし満足感、達成感を味わい様々な知識を獲得してきた。

施設名

ひかり隣保館保育園（柏市、私立保育所）※前年度から継続

アドバイザー氏名

羽田野 茂美（元認可保育所主任保育士）

派遣期間及び回数

令和6年5月～12月 計19回

今年度の活動記録

【5月28日、6月11日】

➤ 今後の進め方について

① <今年度のテーマ3点>

- ・園庭や近隣での植物、生き物に触れ、子どもが不思議に思うことに耳を傾け、一緒に深めていく。
- ・折り紙やハサミを使って、季節のものを作る。
- ・プログラミングを体験していく。→ラキューを使って工夫しながら組み立てる。

② <方針>

保育士主体の保育を感じ、時間をかけて、子ども達の興味関心に向き合うことの大切さ、子どもの声に耳を傾け、保育展開をしていくことの面白さを保育士自身が感じていけるようにアドバイスをしていく。

【6月18日】

➤ 取組の振り返り等

- ① ラキュー・粘土・自由画・ウノゲーム等で遊ぶ。これらの玩具は、朝の時間や室内自由遊びにて、毎日の保育中に使える。特にラキューやトランプ・ウノ等での数の読みや形の組み立てが早い。ラキューの数が多くあり、形ごとに種分けしている。
- ② 子ども達は、日々の遊びから科学的視点の力を持っている。そのすごさに保育士が気づき、さらにヒントが出せるようアドバイスをしていきたい。
- ③ 毎日室内遊びでは、ラキューを組み立てて遊んでいる子が多いので、形の組み合わせや組み立てに目を向け、科学的視点として、変化や取り組みを観察していく。

【6月25日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 段ボールで星形にしたものに毛糸を巻き付け、その上にアルミホイルを覆う。そこにペンで色を付ける活動をした。茶色でぬると、「おれんじいろになったー。」黄色にぬると、「きんいろになったー。」と、アルミホイルの上に描くと色が変わること、光って見えることに驚きと発見を味わっていた。男児が嬉しそうに「にじいろにした。」と指さして羽田野に見せたので、「虹色、ステキー、考えたねー。」

と声をかけた。

- ② パステルですぐ描く子、「むずかしい・・・」と言って考えている子・・・といったが、担任保育士が、描いて終わった子の絵を「皆にみせてごらん。」と言い、「誰でしょう？」と子どもたちに聞くと、それが良かったのか、次々と前に出て、「クイズ、誰でしょうか？」が始まり、皆に見せて当ててもらいたくて、どんどん描き始めては前に出ている。
- ③ 「よく見ているね。髪の毛が長いね。結んだゴムの色同じだね。メガネしているね。・・・」と、細かい部分を褒めてあげると、「ちゃんと見てくれているんだ」と子どもは思うことを担任に伝える。

【7月23日】

➤ 取組の振り返り等

① <ラキュー>

- ・友達と工夫しながら作り、動かし、形を変えている。毎日遊んでいるので、色や左右のバランスも考えているところがすごい。

👉 細かい指先を使っのパーツ組み立ての中には、科学的視点、要素がたくさん見える。毎朝触れて遊ぶことで、自分で考えて、組み立て、形を変化させていき、明日も続きができる環境となっている。日々高度な作りになっていく立体物をこれからも追って担任保育士と共に観察していく。

② <粘土遊び>

- ・自由画帳にクレパスで色を描いた上に、少量の粘土をこすりつけて、色を付けることを子ども達が発見し、遊んでいた。

👉 子どもの表情や作る意欲の中で、色を付ける行為に“すごい”と感じ、ここにも化学的視点として捉えることができると、担任と共に感動したことを確認し合った。

【7月31日】

➤ 取組の振り返り等

① 粘土遊びで「作った物のクイズ発表会」を行う。

② 前回取り入れた“クイズ”「これはなんですか?」。「〇〇さん」「〇〇」「せい かい」という掛け合いが盛り上がった。

👉 子ども達の“やりたい”という遊びは、子ども達も保育士もイキイキとしている。羽田野も一人ひとりに寄り添い、ちょこっとヒントを出す。作った物を認め合う姿はステキである。

【8月20日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 既成の玩具（プラレール・レゴ・ポケモン・様々なブロック・トランプ）で、友達と関わりながら遊ぶ。羽田野は各テーブルを回り、科学的な発見に繋げるように声をかける。ブロックを長く繋げたへび同士の長さの比較や、プラレールの線路組み立て（陸橋・線路の連結等）づくり時、構造の工夫や試行錯誤する姿に着目したことばを子ども達にかける。

- ② 花火を紺色の色画用紙に白クレヨンで線を描き、絵の具を指先につけ、白線の上に絵の具を付ける工程を観察した。副主任保育士も子どもが自分で考えた塗り方を否定せず、面白がって見ている姿に少しホッとした。また、いつもはすぐ終わりにする男児が、この製作に興味を持ち、黙々と絵の具の色を変え、指先の色をポンポン付けている子にも、「すごいねー、きれいだねー。」と、声をかけていた。羽田野もそれらのステキを共有した。活動を通して、先生の声掛けや子どもへの声掛けが柔らかくなってきたと感じた。

【8月27日】

➤ 取組の振り返り等

① <園庭遊び>

- 園庭隅に3名の園児が座り込み、ダンゴムシ探し。覗いてみると、草の下にたくさんダンゴムシがいる。
- 男児は入れ物に1匹ずつ捕まえては、「大量発生、大量発生！」と連弾。「あっ黄色い模様があるからメスだ。」「あかちゃんと子どももいる。」と、大きさの違いを観察している。
- 「足いっぱいあるね。と声をかけると「うん、7本。」ひっくり返ったダンゴムシを見て「足いっぱいある。おなかに白いのある。」「これは丸まんないからワラジムシ。」
- 「何食べるのかな」と聞くと、「はっぱだよ。」「何匹いるのかな？」と、声をかけると、違う入れ物に1匹ずつ移し替えて「17匹いたー」と満足気。

👉 子どもだけでは夢中で集める姿が多いが、傍らに大人がいて聞かけると、そこに視線がいき、観察する目が育つ。体の色・形・大きさ・数等の見た目と、さらに何を食べるのか、どこにいるのかを考えるきっかけになることの大事さを伝えていく。そこに科学的視点に目を向ける力となる。

【9月10日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 2歳児がアリを見つけては容器に入れている。数匹、身体が折り曲がって動いている。「そおっと持とうね。」と声掛けすると、その子なりにそおっと持とうとするが、動くアリに興味があり、捕まえて見たい、持ちたいが強い2歳児である。その気持ちを大事にしたい。
- ② 3歳児が木の実集めや花びら集めをしている。木の実は「おっきい」のを拾っては見せに来る。羽田野はきれいな木の実を拾う。そこで大きさ比べをする。「大きいね」「小さいね」のやり取りをする。隣では容器に小さい花を摘んでたくさん集めている。「たんじょうびにつかうの。」羽田野も花を摘む。「きれいだね。」と共感のやり取りをする。

【9月17日】

➤ 担任保育士と振り返り

- ① ラキューは、見本通りに作ることから、自分でアレンジしながら作ることが増え

てきて、廃材遊びや他のブロック遊びでも、組み合わせて作る姿が見られるとのこと。

👉 “組み立てる・作り直す” 過程の中で、子ども達は工夫して考え、友達と一緒に作る面白さを体験している姿が見られ、目が輝いている。既成の玩具でも廃材素材を使った活動時も、子どもたちはちゃんと考えて試行錯誤する姿が見られていると、担任保育士からの気づきが聞かれた。

【9月24日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 5歳児→ボールを高く上に投げて、地面に落とす遊びをしている男児達。弾みと音を楽しんでいる。弾み具合をみて、ボールを取り換えては、上に投げて音等試している。
- ② 2・3歳児→園庭隅の草原でアリや小さいバッタ等を見ている。アリが自分より大きい死んだ虫をくわえて運んでいるのを、「どこに運ぶんだろうね。」と声掛けしながらしばらく見る。また、小さいバッタみたいな虫がたくさんいて、草原をピョンピョン跳ねているのを見て、「ピョンピョンうさぎみたい」と言って、手で草を触っては、出てくる虫が跳ねる姿を観察する
- ③ 子ども達の観る視線の先、考えていることを察知して大人も共感するひとときが大事であることを伝える。

【10月8日】

➤ 取組の振り返り等

① <ハロウィン製作>

- ・オレンジ・黄色系の絵の具で塗った上に、黒クレヨンで顔を描いた画用紙を配る。それに鉛筆でかぼちゃの輪郭を描き、ハサミで切り取り、紺・紫系の色画用紙を選び、ノリで貼り付ける
- ・その周りにハロウィンを想像して、お菓子やコウモリ、お化け等を鉛筆で描く活動。ホワイトボードに見本を見せたり、描き方を見せたりしてイメージを持たせる。見本を見ながらでも描くのが難しいようである。
- ・その後の白い用紙に鉛筆で周りに貼りたいものを描く活動では、細かすぎたり、小さく描く子が多い。後にクレヨンで色を付け、ハサミで切り取り、台紙に貼る予定のようだが、子ども達はクッキーや飴玉を思い思いに細かく鉛筆で描いたり塗ったりしている。

② <振り返り>

製作での反省点として、鉛筆で描くと細かく描きたくないので、クレヨンで描いた方がよかったのでは・・・と伝える。輪郭だけ描いて、後で色を付けることは難しいと感じた。見本や描き方は伝えなくてもよいのでは・・・と感じる。

【10月15日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 2・3歳児→砂あそびでは、シャベルやカップを持ってきて、山づくりや、カップ埋め、カップ砂入れをしている。容器に砂を平らに入れ、「ケーキ」「うどん」を作っている。また、アリやダンゴムシを捕まえてカップに入れる子もいる。上はサラサラ砂が多いが深く掘ると、湿った砂があり、型取りもでき、白砂・黒砂を上手に利用している。道具の使い方も分かり、様々な道具を運んで作っている。それぞれに寄り添い、言葉かけをする。

② <振り返り>

先週のハロウィン製作で、鉛筆で描いたものが細かすぎたので、クレヨンの方が良かったのでは。というアドバイスを受けて、やり直したとのこと。やはりクレヨンの方が子ども達には、描きやすかったようである

【10月22日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 2・3歳児が、カップを持ち歩いて、ダンゴムシやアリ・石ころ等を入れている。大きな目の石をカップに入れ、「みて、じゃがいも」と見せに来る。本当にジャガイモの形に見える、それを左右に振ると音がするのに気づき、カラコロ鳴る音を一緒に楽しむ。
- ② 様々な砂場用具の種分けしたカゴから選んで、穴掘り・砂山作り・容器に砂入れをしている。

【11月12日】

➤ 取組の振り返り等

- ① 幼保小交流会「秋見つけ」に参加。
1年生とグループごとに行動。秋見つけでは、ドングリ・松ぼっくり・モミジバフウの実・紅葉した落ち葉等を集めた。その後、レクリエーションで、「増やし鬼ごっこ」と、「オオカミさん今何時？」ゲームを行う。

【11月19日】

➤ 取組の振り返り等

① <秋見つけの素材を使っの製作>

- ・セロテープ・ハサミ・シール・ペン等を使って、思い思いにイメージして作ろう、描こう。落ち葉・どんぐり・フウの実使用。8つ切り画用紙に貼り付ける。
- ・黒目になるシールがあり、落ち葉やフウの実に目を付けたり、色画用紙を切って、付け加え形にしている。一人ひとりに寄り添いながら、声掛けする。
- ・子ども達は、丸まっているドングリや凸凹のフウの実をロテープで貼りつけるのに苦戦しているが、1時間前後集中して作成していた。
- ・拾ってきたままの木の实を使用している為、くっつきにくいのと、ドングリから虫が出てきている。木の实は、熱湯消毒してから使用すると良い。セロテープより、ボンドタッチの方が見た目きれいである。

② <園庭遊び>

- 女兒がバッタの体を裏返して顔や足お腹を観察している。
- 小さいクラスの子に見せたり、友達に見せ、バッタに夢中。
- 「バッタに羽根があるから、そーっと持ってね。」と伝えると、「ほんとだ・・・」
と一言。「飛ぶんだよ」と言うと、「ほんと？」と驚く。優しく持って見せ合う。

【11月19日、12月3日】

➤ 取組の振り返り等

① <ラキュー振り返り>

「ラキューを使って、個や友達と試行錯誤し、工夫しながら組み立て、納得するまで集中して創る喜び、達成感を味わう。」については、個人差があるが、マニュアル通りに作る子、マニュアルが分からず友達に教えてもらう子、パーツを追加し、アレンジする子、マニュアル無しで、自分で考えてオリジナリティーなものを作る子がいるが、全体的には科学的視点が多くみられた。

<園庭遊び>

「折り紙や自然物、ハサミやクレヨンを使って季節のものを作る。描く。貼る。」については、見本を見せて行うが、出来るだけその子の思いを大事にしたいとのこと。出来上がりを展示することよりも、途中経過のその子の思いに寄り添いながら、具体的なところを褒めて認めたりすることが大事であることを伝えた。また、つぶやきを書き留めておくと、その時の思いが伝わることも伝えた。

ラキュー玩具の変化

4月から毎日取り組み、説明書通りに作ることから、自分で工夫しながら作る面白さに変化していった。



色の使い方への気づき

赤色で描いた上に、他の色を重ねて、色の変化を発見。さらに、自分の粘土に色をつけたいと、自由画帳に欲しい色を塗ってこすりつけ、様々な色の粘土で作り、友達に見せ合う姿が後半見られた。



活動を通じての感想等

【アドバイザーの感想等】

☆園児の成長や変化

- ・園庭での生き物見つけ・砂遊び・ルールのある遊び・異年齢児との遊びを通して、友達から学んだり、アドバイザーのヒントによって、個の観察力に変化が持てたと感じる。子ども自身もアドバイザーの話に耳を傾ける姿があり、観る目も（担任・園児・他の職員等）発見もあった。

- ・ラキュー玩具の出来上がりを日々展示することで、誰もが見える環境で、続きや変化、作り上げる面白さや達成感を味わうことが出来た。友達や保護者、他の職員も目にする事で「すごいねー」という感動が、子ども達にもつながっていることがステキであった。

☆アドバイザーとして感じたこと

- ・訪れる園との信頼関係づくり（担任・園児・職員等）から取り組むことが必須である。担任保育士がアドバイザーの言葉に耳を傾け、やってみようという前向きな心持ちになったり、お互いの気持ちを言えるようになった時に、双方が寄り添える関係になる為、信頼関係が築けていける。

- ・保育士主体の園が多いが、子ども主体の保育を目指してほしい。

保育士がやりたいことではなく、子どもの発達や、今何に興味関心が子ども達にあるのかを観察しながらそれに沿った保育展開をしていくことが、これからの保育には大事であることを伝えていく。（教えるのではなく、子どもの気づき、発見に耳を傾ける保育展開にしていくことで、“自分で考え、行動する子ども達に育っていくこと”に繋がっていく）

- ・特に自由遊びの中で、一人ひとりがやりたいこと、友達とのやり取りの変化が見られるので、見守ることが多い時間だと思うが、そこに耳を傾け寄り添い、子どもの思いに即したヒントを出すことで、新たな発見につながる。例えば、カップにダンゴムシやアリを捕まえては集めるだけの姿に、大きさや体のつくり（顔・目・脚・腹部分）に気づかせる等。

☆施設で取り組んでほしい保育実践

- ・毎月の製作（季節のもの等）を保育士が作った見本をホワイトボードに掲示し、作り方を説明して、皆同じものを作る活動の良さとは何か。（できた・できない・やりたい・やりたくないという子どもの気持ちに添っていないだろうか？）それより子ども主体の保育では、

テーマはあったとしても、素材や道具を見て、自分で考え、工夫しながら描いたり、作ったりし、保育士が思いもよらない子どもの想像力と工夫力に出会うことで、「すごいねー、よく考えたねー」と感動する場面にたくさん出会う。否定せずに、共感することを意識していると、子どもも達成感と自信が身につく。(もっと描きたい、作りたいという意欲につながる。)

特に年長クラスになると、そこに素材や、テーマがあれば、“自分で考え、試行錯誤しながら描いたり作ったりできる面白さが必要。また、友達のアイデアから学ぶことも多い。

☆意見・感想等

- ・全国的にインクルーシブ保育が増える中、集団活動では無理なことが多く、その子自身にとっても、いい環境にはなっていない現状がどの園にも見える。1対1の保育が必要な園児がいるが、人手が足りず保育士の対応が難しい。さらに小中学校でも知的・情緒等での特別学級の児童・生徒がこれからどんどん増えていく現状と、長期欠席が増える現状を各校長先生から話があり、どの子にもステキな部分があるので、そこを大事にできる環境(ヒト)を作ることがまずは必要と考える。一人ひとりに寄り添う時間が持てない。全体を観てしまう現状である。第3者のアドバイザーの必要性を感じると共に、振り返り時間や、他の保育士とも共通理解し合える場があると良いと思う。ただ、なかなかその時間が取れない現状でもあり、そこが課題でもある。

- ・年長クラスの子どもの考える力・行動力・科学的視点は、保育士の観察力と子どもが主体となる環境を用意してあげることに尽きると思う。(子ども自身はその力を持っているが、大人の認める環境が少ないと伸びる芽が止まってしまう。)